

第4学年 国語科授業実践

1 単元名 ごんぎつね

2 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	学びに向かう力・人間性等
様子や行動、気持ちや性格を表す語彙の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には、性質や役割による語彙のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにする。	- 文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気づく。 - 文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えを持つ。 - 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて、叙述を基に具体的に想像する。	- 積極的に登場人物の気持ちの変化を想像し、学習問題に沿って物語の感想を書こうとしている。 - 読んで考えたことを話し合い、一人一人の感じ方などで違いがあることに気付こうとしている。

3 教材のとらえ

「ごんぎつね」は、民話的な語りと色彩豊かな情景描写により、子供達が物語に惹き込まれていく作品である。最後の場面までは、「ごん」からの目線で語り手が話を紡いでいくために、児童も「ごん」に気持ちを寄せて読んでいくと考えられる。しかし、なぜごんが償いを続けるのかは、「ごんがうなぎを逃がしてしまい、兵十のおっかあに食べさせてあげられなかったと考えたため。」「ごんのせいで、兵十がぶん殴られてしまったため。」「兵十も、ごんと同じひとりぼっちなため」という考えで終わってしまうことも考えられる。しかし、文章を読んでいくと、栗などを固めて土間に置く様子（投げ入れたいわしとの違い）や、兵十のかげをふみふみ後をつける様子などから、ごんが兵十に惹かれていっている様子も読み取れる。授業では、ただの償いではなく、兵十に心を寄せていくごんの変化も読み取れるようにしていきたい。さらに、最後の場面では、語り手の目線が兵十で始まり、またごんへと変化する。その目線の変化や、ぱたりと銃を落とした様子、青いけむりの様子から、兵十の気持ちの変化にも気付いていくことができる。そのために、情景描写やオノマトペにも注目しながら、ごんや兵十の気持ちを読み取っていくことができるようにしていきたい。



4 本時の指導案

本時の目標 「引き合わないのに、なぜごんは償いを続けるのか、叙述を基に話し合うことで、ごんの気持ちが変化していることに気づくことができる。」

本時の学習

学 習 活 動	教 師 の 支 援
1 前時までの学びを振り返る。	○なぜ償いを始めたのかなど、前時の内容を想起し、学習問題を確認する。
引き合わないのに、なぜごんはつぐないを続けたのだろう。	
2 本文を音読する。	・ 本時は長い文章の中から叙述を探すことになるため、「引き合わない」と言った理由にかかわる一部分を音読するように指示する。
3 なぜ「引き合わない」と言ったのか理由を確認する。 ・ 自分がやっているのに、神様と言われたから。 ・ 嫌な気持ちになった。 ・ ちょっとイラっとした。	・ 前時での板書を基に、話し合った内容を確認する。
4 引き合わないのに、なぜ償いを続けたのか話し合う。 ・ うなぎを逃がして、兵十のおっかあに食べさせてあげられなかったから。 ・ いわしを盗んで放り投げてしまい、兵十がなぐられたから。 ・ 同じひとりぼっちになっちゃったし、寂しさが分かったんじゃないかな。 ・ でも、自分がやっていると気づいてほしい気持ちもあると思う。	・ どこからそう思うか、叙述を基に話し合うことができるよう声掛けをしていく。 ・ 必要に応じて、意図的な指名をすることで、「気づいてほしい」というごんの気持ちの変化に気づくことができるようにする。
ごんは、兵十に自分がやっていると気づいてほしかったのかな？	
・ 気づいてほしかったと思う。だからついて行ったんじゃないかな。 ・ すごく近い場所にいるね。 ・ やっぱり、気づいてほしかったんじゃないかな。 ・ 兵十のことが、すごく気になっていたんだと思う。 ・ 前より、兵十に気持ちが近づいているんだと思うよ。 ・ ごんの気持ちが変化しているんだね。	・ 「かげぼうしをふみふみ」という叙述を動作化することで、ごんがどのくらい兵十の近くにいたかを確認し、そこから理由を考えることができるようにする。
5 本時の学習を振り返る。 ・ 話し合いを通して考えたことを、ノートに書く。	【思考・判断・表現】 ・ 文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気づく。 ・ 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて、叙述を基に具体的に想像する。 ・ 話し合いをしてわかったことや、自分の考えや、だれの意見で考えが変容したかななどをノートに書けるよう、声掛けをしていく。